
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 貉《むじな》

/ \：二倍の踊り字（「く」を縦に長くしたような形の繰り返し記号）
(例) ます / \ 自分らしい道を

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) [# 地から 1 字上げ] 芥川龍之介

この集にはいつている短篇は、「羅生門」「貉《むじな》」「忠義」を除いて、大抵過去一年間 数え年に
して、自分が廿五歳の時に書いたものである。そうして半《なかば》は、自分たちが経営している雑誌「新思潮」
に、一度掲載されたものである。

この期間の自分は、東京帝国文科大学の怠惰なる学生であった。講義は一週間に六七時間しか、聴きに行かない。
試験は何時《いつ》も、甚《はなは》だ曖昧《あいまい》な答案を書いて通過する、卒業論文の如《ごと》
きは、一週間で匆忙《そうぼう》の中に作成した。その自分がこれらの余戯《よぎ》に耽《ふけ》り乍《なが》
ら、とにかく卒業する事の出来たのは、一に同大学諸教授の雅量に負う所が少くない。唯《ただ》偏狭なる自分
が衷心から其《その》雅量に感謝する事の出来ないのは、遺憾である。

自分は「羅生門」以前にも、幾つかの短篇を書いていた。恐らく未完成の作をも加えたら、この集に入れたもの
の二倍には、上っていた事であろう。当時、発表する意志も、発表する機関もなかった自分は、作家と読者と
批評家とを一身に兼ねて、それで格別不満にも思わなかった。尤《もっと》も、途中で三代目の「新思潮」の同人
になって、短篇の一つ発表した事がある。が、間もなく「新思潮」が廃刊すると共に、自分は又元の通り文壇
とは縁のない人間になってしまった。

それが彼是《かれこれ》一年ばかり続く中に、一度「帝国文学」の新年号へ原稿を持ちこんで、返された覚え
があるが、間もなく二度目のがやと同じ雑誌で活字になり、三度目のが又、半年ばかり経って、どうにか日の
目を見るような運びになった。その三度目が、この中へ入れた「羅生門」である。その発表後間もなく、自分は
人伝《ひとづて》に加藤武雄君が、自分の小説を読んだと云《い》う事を聞いた。断って置くが、読んだと云う
事を聞いたので、褒《ほ》めたと云う事を聞いたのではない。けれども自分はそれだけで満足であった。これが
、自分の小説も友人以外に読者がある、そうして又同時にあり得ると云う事を知った始《はじめ》である。

次いで、四代目の「新思潮」が久米、松岡、菊池、成瀬、自分の五人の手で、発刊された。そうして、その初
号に載った「鼻」を、夏目先生に、手紙で褒めて頂いた。これが、自分の小説を友人以外の人に批評された、そ
うして又同時に、褒めて貰《もら》った始めである。

爾来《じらい》程なく、鈴木三重吉氏の推薦によって、「芋粥《いもがゆ》」を「新小説」に発表したのが、「
新思潮」以外の雑誌に寄稿したのは、寧《むし》ろ「希望」に掲げられた、「虱《しらみ》」を以《もつ》て始
めとするのである。

自分が、以上の事をこの集の後に記したのは、これらの作品を書いた時の自分を幾分でも自分に記念したかつ
たからに外ならない。自分の創作に対する所見、態度の如《ごと》きは、自《おのずか》ら他に発表する機会が
あるであろう。唯《ただ》、自分は近來ます / \ 自分らしい道を、自分らしく歩くことによってのみ、多少なり
とも成長し得る事を感じている。従って、屢々《しばしば》自分の頂戴《ちょうだい》する新理智派《しんりち
は》と云い、新技巧派と云う名称の如きは、何《いづ》れも自分にとっては寧《むし》ろ迷惑な貼札《はりふだ
》たるに過ぎない。それらの名称によって概括される程、自分の作品の特色が鮮明で単純だとは、到底自信する
勇気がないからである。

最後に自分は、常に自分を刺戟《しげき》し鼓舞してくれる「新思潮」の同人に対して、改めて感謝の意を表
したいと思う。この集の如きも、或《あるい》は諸君の名によって 同人の一人の著作として覚束《おぼつか
》ない存在を未来に保つような事があるかも知れない。そうなれば、勿論《もちろん》自分は満足である。が、
そうならなくとも亦《また》必ずしも満足でない事はない。敢《あえ》て同人に語を寄せる所以《ゆえん》である。

大正六年五月

[# 地から 1 字上げ] 芥川龍之介

底本：「日本の文学 33 羅生門」ほるぷ出版

1984（昭和59）年8月1日初版第1刷発行

1986（昭和61）年12月1日初版第3刷発行

底本の親本：「羅生門」阿蘭陀書房

1917（大正6）年5月発行

入力：j.utiyama

校正：earthian

1998年12月28日公開

2004年3月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。